農耕の源流エジプトを往く

第3回　育苗と田植えと水管理

写真・文／本誌副編集長・浅川芳裕

エジプトは知られざる稲作大国である。収量は堂々の世界一位、生産量世界15位、輸出量10位の地位を占める（FAOSTAT2009）。決して恵まれているとはいえない圃場条件と機械装備だが、現地の農家は「コメは儲かる」と口々に笑顔で話してくれた。



田植えの様子。



野外の育苗圃。温暖なためハウス育苗は必要ない。この地域では、小麦、コメ、トウモロコシ、飼料作物の4年輪作体系で、小麦の収穫圃場の周辺では田植えをまつ育苗圃があちこちでみられる。





移植から約1週間後の水田。水が貴重なため、入水は4、5日に1回と節水栽培をしている。それにより、ha当たり5000㎥ほど作期を通じて節約できるという。



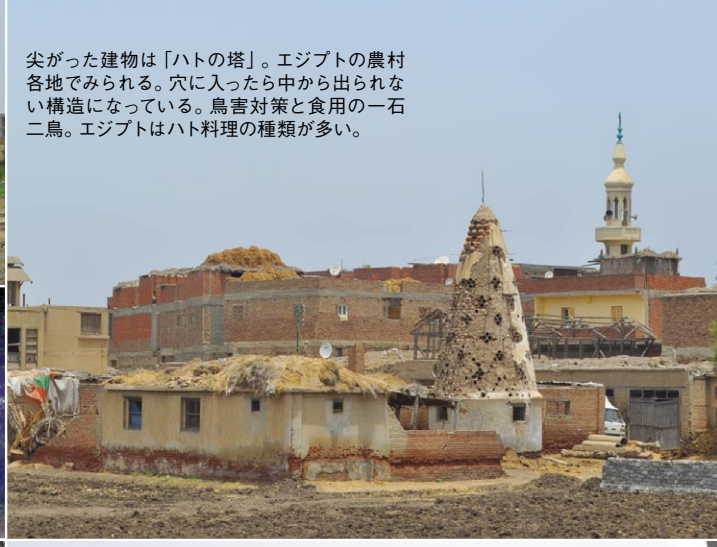
手植えが主流で、必要な量の苗をはぎ取っていく。



このサイズの幼苗で移植するという。



田植え前にレーザーレベラーで整地する様子。馬耕や手植えの伝統農法とハイテク農法が混在している。一般道でも移動中のレーザー受光器とレベラを搭載したトラクタを何度もみた。



尖がった建物は「ハトの塔」。エジプトの農村各地でみられる。穴に入ったら中から出られない構造になっている。鳥害対策と食用の一石二鳥。エジプトはハト料理の種類が多い。



エジプトでも水田地帯の市街化が進む。





写真（下中）の農民が一人手作業で畦づくりをしていたのに対し、真隣の田んぼの3人はブルを使い、トラクタとレーザーレベラも保有している。



代掻きの様子。







稲作に備え、犂で畔と用水路をつくる。膨大な労働量だ。「お疲れさま」と声をかけるとガッツポーズで答える農夫。昼食で一休み。



手制の用水路が完成し、無事入水。





用水路から育苗圃へポンプで灌水。水流を邪魔する自生植物をさらう。

エジプトで稲作とは驚く方もいるかもしれない。何を隠そう、エジプトは世界3位のジャポニカ米輸出国である。しかも、稲作の近代化に寄与したのは日本人の技術者だ。1970年代に始まった㈱国際協力機構による支援は今も続いている。

歴史を紐解けば稲作導入は古代ローマ時代。アレキサンダー大王がアジアから故郷に持ち帰り、その後エジプトに伝播したといわれる。

コメの作付面積58万haの大半はジャポニカで、ha当たり平均収量は約10tと世界一だ。1980年代の5tから30年で倍増している。高収量の秘訣は何か。「生育期の長日と夜間の冷涼さが一番のポイント。最近の伸びは品種改良が大きい」と現地を案内してくれた地主は話す。

訪問した産地の主力品種は120日栽培のGiza177だ。収量が多いだけで普及したわけではない。乾燥地帯がゆえ、水効率の高い品種こそ評価される。従来普及していた155日栽培の品種Giza171に比べ、177はha当たり2000ℓも節水できる。「コメを振興したい農業省より水利用を制限したい灌漑省のほうが権力が強い」（地主）という背景もある。

そんな制約条件のなか、収量世界一の座を勝ち取った。